



割り切れない状況を割り切る

「割り切る」ことが難しい場面では、とかく争いが起こるものだ。そのせいか、割り切れないものを割り切る話は世の中には非常に多い。

例えば、有名な数学の小話に「ラクダの分配の話」がある。遺産である17頭のラクダと「長男に $1/2$ 、二男に $1/3$ 、三男に $1/9$ ずつ与える」という遺言とが残されたが、17はどの数字でも割り切れず、争いになったという。そこに賢者が現れ、自分のラクダ1頭を与えて18頭とした上で再び分配を促した。結果、長男9頭、次男6頭、三男2頭となり円満解決。賢者は余った自らの1頭を牽き、颯爽と去っていった。割り切れないと思えた数が1を加えただけで見事に割り切れてしまうというこの話は、数学的には「すべての分数は単位分数の和で表せるか、その表し方は一通りか」という問いに繋がっている。

だがこの話にはオチがある。近所の別の兄弟に、同じく17頭のラクダと、長男 $1/2$ 、二男 $1/3$ 、三男 $1/6$ という遺言が残された。争う兄弟に、ある男がさきの賢者を真似て1頭のラクダを与える。その結果、無事遺言通りに割り切ることができた。が、今度は余らず、男は自らのラクダを失った…。賢者になりたかったこの男が、割り切れない想いを抱えて去ったことは想像に難くない。

そんな哀れな彼に、「三方一両損」の話を見せて

あげてはどうだろう。三両を拾った左官が落とし主の大工に届けたところ、江戸っ子の両者は共に宵越しの銭を嫌ってこの三両を押し付け合い、ついに訴訟となった。そこで大岡越前は自らの懐から一両を加え、四両とした上で二人に二両ずつ渡し、「双方三両受け取れた所、二両となって一両の損。越前も一両の損。よって三方一両損」と言ってめでたく解決した大岡名裁きの一つである。

さてこの話、ラクダを失った男と同じく大岡も場を

割り切るために一単位の損失を出している。しかし自腹を切った大岡は、ここでは一転賢者の扱いだ。何故か？それはこの裁きが、金銭的な損得に主眼を置いていないからに他ならない。すなわち気の持ち様次第で、あの哀れな男も賢者になりえたのである。

割り切れない状況を割り切るためには、数の上だけでなく、気持ちの上で

も割り切れるような工夫が必要である。だからこそ、現実世界では割り切ることがより困難だとも言えるのだが。仮に、市場の混乱で生じた損失の責任をチームの誰か一人が負わなければならないとしたら？

そんな状況下で大岡のように振る舞える人は、例え一日一善（えちぜん）の志を持っていたとしても、そう多かあ（大岡）いるまい¹⁾。（片岡 佳子）



1) 呆れる前に、落語「三方一両損」の落ちをご覧ください。